

文化高知 38

高知の文化は

四国山脈を背に、南は太平洋に面し、東西に長い土佐は、自然に恵まれ温暖で住み易い地であるが、昔は遠流の地、文化果つる所であった。

明治維新の志士、政治家、科学者、財閥が生まれた高知は、また、自由民権発祥の地として今日を生きる人々の心の支えではあるが、これらの傑出した人士は、何れも国の中央で活躍しており、高知は長く後進県の名で呼ばれてきた。

そして、交通事故の多さ、生活の貧しさ、離婚率の高さ、飲酒量の多さなど、お世辞にも文化的とはいえない。この土地で、わたくし達の生活のレベルアップを考え、精神文化豊かな所として育つ可能性を、どのような姿に求めたらよいものであろうか。

県民性格の特徴は、イゴッソウ、ハチキンに代表されるように、協調性に乏しく、礼儀しらず、田舎的で粘りがなく、言いたいことは言うが議論の発展性に乏しく頑固である。酒の場ではマアマアと寛容で、一般

に粗削りである。従って、ローカル色をしっかりと把持し、自然の守られた、温かさで生命の躍動する、素材のある、そして、したたかなもの



ふたり

中城克巳

をたっぷり含んだ文化作りとなるだろう。

観光や余暇のための、同じような小さなレジャーランドやゴルフ場を

藤戸 せつ

作ることは、それだけで自然破壊となる。

高知市をはじめ、各市のキャラクター作りと、自然保護、伝統産業の保護がなされ、他にない特性を守り育てることが基本的に重要である。河川、海洋の汚染防止、森林の保護により、魚類をはじめ、動物、植物の自然な活性化を図るなど、全県的かつ徹底したプロジェクトチームを組み、息長く実践することが大切である。

そして更に大切なことは、精神文化の問題である。大人は勿論のこと、子供たちに、環境を守り自然を大切にすることを育てる教育、躰は直ちに取組まねばならない。幼い時に心に根づいたものは、その人の生涯を支えうる。単なるミーハー文化でなく、本物の高知の息吹の中で文化を伝承し、未来に花開かせる、エネルギーあふれる心豊かな人作りが最も大切な問題であり、家庭、学校、社会の中で、その事を見直すべきである。

(藤戸病院院長)

わが青春のトランク公演



安岡真智子

私は高知市農人町で生まれ、その後、薊野・中水道と二十一年間を高知で過ごしましたが、最高に楽しい思い出のあるのは、演劇と大きな関わりを持ってた高知女子大学の学生の頃です。

なにしろ「学部は？」と訊ねられたら「文学部演劇科です」と答えざるを得ない程、演劇部の活動に打ち込みました。(その上、バレーボール部もかなり熱心に行ったのですから学問の方は想像がつくというものです。)中でも一番の思い出がトランク公演なのです。

『トランク公演』というのは、文字通りトランク一つを持ったトサ廻りのことで、アメリカでこの名称ができたそうです。

わが高知女子大学演劇部と高知大学演劇研究会の有志の合同混成チームは、毎年夏休みの少し前から準備にかかり、七月十日頃から二十日過

ぎの小学校が夏休みの短縮授業に入る頃、幡多地方へ十人前後の俳優兼裏方集団となって出掛けるのです。各々が大工道具やテープレコーダー、簡単な照明機材、それに衣装やメイキャップ道具をトランク(風呂敷包みやむき出しのものの方が多かった?)に詰め込んで、高知港を夜遅く出航します。

浦戸湾を出た途端、船は大きく左右に揺れ、たちまち全員船酔いでダウン、ひたすら船底でゴロゴロと忍耐の数時間を過ごします。

ところが翌朝六時頃、土佐清水の港に着いて青く澄み切った海と空を発見するやいなや、前夜来の苦行から解き放たれ、歓声を上げながら、いざ小さな観客の待つ村の小学校や保育所に向かうわけです。

勿論タクシーなんて贅沢なものには乗れず、なかなか来ないバスを乗り継いで、予め公演を受け入れて下さるとハガキで返事のあった目的

に辿り着くと、早速、教室を臨時の劇場に作る作業を始めます。先生方や子供たちも手伝ってくれて二、三時間で暑くて危なつかしい



幡多路への巡回公演当時のチーム
右端で立っているのが筆者

劇場が出来上がり、いよいよ過疎の村の子供たちの期待に満ち満ちた眼の前でお芝居の始まりです。さっきまでカナヅチ片手に汗みずくでゴソゴソやっていたお兄さんお姉さん達が、教壇の舞台の上で笑ったり悲しんだりです。

演目は、民話やおとぎ話から題材を取った、例えば『彦一話』のようなもので、高知市の中央公民館等で私たちが学生演劇として手がけるいわゆる新劇っぽい難解なものではないのですから、子供たち以上に私たち自身が楽しんでました。

そして、終演後、一人十円の観劇料で楽しんでくれた子供たちと和気あいあいと元の教室に戻すのです。大学四回生の時、演劇への病高じて、ついに劇団「前進座」に入り、そこで何度も巡業生活を経験しましたが、このトランク公演の体験こそが私の演劇の原動力・出発点となっています。

宿直室に泊めてもらって、夜の校庭のブランコに乗りながらのミーティング、その時の満天の星たちと流れ星のすごさ、又、バスに揺られながら眺めた足摺の海の輝きは、まさに私の青春の大事な大切な絵の一枚、宝物なのです。

(女優・ホリホツアカデミー所属・大阪市在住)



砂浜美術館 学芸員きどり 松本敏郎

「私達のまちには美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」最近の美術館ブームを「こけ」にしたようなこの言葉が私達のコンセプトです。

この頃、町のあちこちで「砂浜美術館」の事が話題になっています。私達にとって良くも悪くも、色々な話題の展開がされているのですが、聞き耳を立てて、つい苦笑いをするのが「砂浜美術館いうたらどこに出来たがぜ」。「ほりや、夏に浜に砂の“デコ”をつくったろが、あれよえ。」という会話です。

しかし、近所のおんちゃんやおばちゃん、そんな話をするのはごく普通の事でしょう。

昨年6月、「砂浜美術館の企画」を新聞に掲載してもらったところ、まず一番先に私の所に来たのが、建物の美術館を手がけている企業のセールスマンでした。気の毒な程、色々な照明や展示パネルのパネルレットを並べ「これがいいですよ。あれがいいですよ。」と説明してくれました。

それぞれの勘違いは、今もまだ色々あるようですが「砂浜美術館」という五文字は、とにかく私達に「ものの方を変ええる事の楽しさ」を教えてくださいました。

たとえば、今ブームの「鯨」。かつて「鯨」は漁師にとっては本当に

迷惑な存在でした。

「鯨」が泳いでいると漁が無いのです。それが「鯨」を砂浜美術館の作品にしてしまったのです。そして漁船でのホエールウオッチングが大変な人気となり、年間9000人を越す人達が、全国から来ています。今「鯨」は漁師にとって大切な財産となっています。又、砂の彫刻。つい先日、町の議会である議員さんが「20〜30歳のええ大人が砂遊びをして——」と叱ってくれました。「砂遊びは子供の特権」という見方を改めて「大人が本気の砂遊び」をしたのですからごもつともです。しかし、それが多くの人達にびっくりするよ

うな感動を与えた事も事実です。私達は「感動がなければ地域活性化はできない。」と考えています。だから「ちよつと待て、20〜30歳だけじゃないぞ、40歳もある。」と言っています。



砂浜美術館の原点のTシャツ写真

展も「写真展は室内でするもの」という概念を捨てた企画です。Tシャツがキャンバス、写真をTシャツにカラーコピーして波打ち際に洗濯物を干すように展示します。そうすると24時間オープンシーサイドギャラリがそこにできあがります。潮が満ちて来ると作品が砂に写り、風が吹くと踊り出す。Tシャツ一枚一枚も作品ですが、沢山のTシャツが並んだ風景そのものが素晴らしい作品となりました。

今年は一〇〇枚のTシャツの作品を展示しましたが、将来は一〇万枚、しかも地域の縫製工場で作った「砂浜美術館オリジナルTシャツ」を使ってギャラリを実現するのが私達の夢です。

長さ四kmの砂浜を美術館と考えると発想は限り無く広がります。今、私達の仲間には誰もが「砂浜美術館の学芸員」をきどっています。

最近、地域活性化などが話題にされる時、「ものの方を変ええることが大切」と誰もが一様に説くようになります。正直なところ、そういう理屈にはあまり新鮮味を感じなくなっていました。それが大変大切な「キーワード」であるということが「砂浜美術館」という五文字に出会って本当によくわかりました。

(幡多郡大方町・砂美人連事務局)

人形劇場の 今とこれから

広松ひとし

第83回木村会館人形劇場
岡山の「たけのこ」招待公演

〔上演作品〕
(1)グリムのヘンゼルとグレーテル
(2)イギリス古典の三びきの子ぶた
〔上演日時〕
11月18日(日) 1時30分

のチラシがブーンとインキの香りを漂わして出来上がった。

この木村会館人形劇場が、毎月第三日曜日を定期公演日として、市立旭文化センター木村会館三F大ホールを根城として旗揚げをしたのは、昭和58年10月16日のこと。それから数えて83回、コツコツと月1回をたゆまずに歩み続けてきた。この間8カ年を経ることになる。

県下のアマチュアのサークルが、人形劇を創り続け、あるいはプロの人形劇団を招き、高知の子どもの文化の創造に取り組んで来たことは、素晴らしいことで、立派な仕事だと自負している。

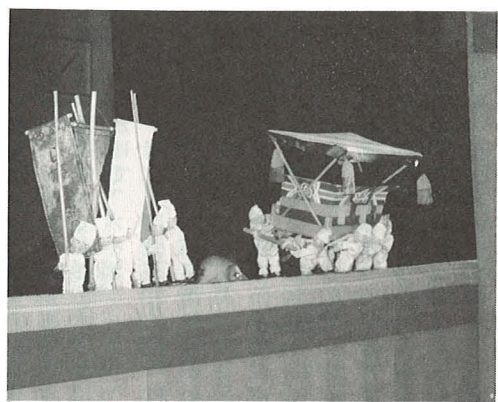
その間、いろいろと心温まるふれ

あいの場があったが、一、二を上げてみよう。

その1 1カ年かけて準備して、発表したグリムの生誕二百年記念公演「グリムグリム」Ⅱ「わたしのグリム」(昭和61年12月4日～7日) 8サークルの競演の成果は、高知県の人形劇史に特筆すべきものであった。その質、量ともに高く満足のいけるもので、その後の再演の希望に込めている。

その2 第80回記念公演として、初めて外国の人形劇団、韓国のソウル人形劇場を招いた公演(平成2年5月20日)の舞台。韓国語での上演であったが、感動の輪が広い会場に広がっていった。

このように1回1回が100名前後の小劇場ではあるが、観客と劇団と運営を担当するサークル連絡協議会スタッフの三者が見事にかみ合い、触風あまたある間におはしませ「私のり」ということになっていて、僕らに再建されていることである。封



ようにして、ますます運動が加速しているように思う。

私達の木村会館も変型ではあるが、公立施設での定例劇場として、誇りに思っていると思う。

ピコロ座は、木村会館人形劇場の一〇〇回を目指して推進し、この小劇場にふさわしい上演を志したい。つまり、「ピコロ座の人形劇」というダイナミックな、美しい舞台を創造することであり、観客と共に創り出す舞台を心がけていきたい。そこに心温まる触れ合いと交流の場の人形劇場があると思う。

大村会館人形劇場
まむらいかいけんにんぎょうげきじょう

韓国 ソウル人形劇場 高知初公演!!

日時/5月20日(午後1時30分)
会場/旭文化センター(3階ホール)
※駐車場は、ありません。
※72-0374(旭駅前郵便局の隣1つ南側) ※田舎の北側

大人=900円・子ども=400円

●主催/旭文化センター
●共催/旭文化センター・旭文化センター・旭文化センター
●運営/高知県人形サークル連絡協議会
●会場/日本生協旭文化センター(旭駅前郵便局の隣1つ南側) ※田舎の北側

平成2年度:高知市文化振興事業 第80回記念公演

(人形劇団ピコロ座主宰)

ソである。中央に位置し、伊那谷の人形芝居の伝承もあるところ。今年、参加劇団234で一八〇〇人、上演劇団120、二一〇ステージ。(8月2日～5日)外国人形劇団も8カ国にのぼっている。今や夏のこの飯田カーニバルを除いては、人形劇のことを語れないとも言われている。

このような、全国的な人形劇の活性化の中で、札幌にまず公立の人形劇専門劇場(こぐま座)が生まれ、横浜、飯田にも設立された。また、名古屋では、生命保険会社が、人形劇専門ホールを提供している。この

高知県と近畿圏とは、古くから経済・文化面は勿論、人的交流の面でも最も密接な関係にあることは、承知のとおりで、この圏域に在住する高知県人並びに縁故のある方は、故郷高知県の人口に匹敵するだろうと言われています。

このような背景から郷土を同じくする有志により、遠く明治時代から京阪神地区で県人会が結成され、会員相互の連絡と親睦が図られておりましたが、近年、都市のスプロール現象で衛星都市に人口が集中し、これらの地域でも統々と県人会組織が結成され、昭和45年当時には、近畿地区に8地区県人会と5職域県人会があり、又、組織化しようとする県人会が3地区にあり、それぞれ独自の活動をして、県人会相互の交流については殆ど皆無の状態でした。

たまたま昭和46年度が高知県大阪事務所の開所50周年の記念の年に当たったことから、県人会組織の統一化、大同団結を図ろうと、近畿地区県人会(11地区)の同意を得て、昭和46年8月18日に高知県人会近畿

福利を増進し郷土の発展に寄与すること」で、年一回の総会の開催や、郷土の公的事業並びに産業・文化の発展のための協力等の事業を行うことになっています。

現在加盟している県人会は、12地区県人

成人の日を迎え、

高知県人会近畿連合会

浜口武久

連合会が正式に発足し、本年度20年の成人の日を迎えることになり、この10月28日に第20回記念大会がもたれました。

当連合会の目的は「郷土愛の精神に基づき、会員相互の連絡と親睦を図り、融和と

会と3職域県人会で、会員数は約三千人、役員(会長・副会長)は次のとおりです。

会長 大森 正男(大阪高知県人会会長)

副会長 岡村 馨(旭同)

同 大西 健一(京都同)

副会長 公文 康(神戸同)

同 川島 晴見(北河内同)

同 永良 武郎(東大阪同)

同 長山 鉄男(堺南同)

同 武智 虎義(西大阪同)

同 折寄 武士(北摂同)

同 浜渦清三郎(茨木高槻摂津同)

同 南 顕(城東同)

同 竹瀬 福次(尼崎同)

同 酒井 芳申(経済クラブ同)

よつやく結成20年の成人の日を迎えた県人会連合会ですが、原点上立ち、更に近畿圏と郷土高知県の懸け橋となるよう努力して参る所存ですので、今後ともご支援の程よろしくお願いを申し上げます。

(高知県大阪事務所内、高知県人会近畿連合会事務局長)



に、高知県人形劇フェスティバルを二つ目の事業として運営している。この人形劇フェスは、毎年5月末に実施している。今年は5月26・27日の一泊二日の日程で、第15回(にもなった)記念行事として、韓国ソウル人形劇場を招き、それに札幌、東京、飯田、岡山、北九州、徳島、香川、愛媛と、プロ、アマの劇団を招き、県内サークルとの触れ合いの場を盛大に実施でき、記念フェスを成功させた。

私が属する人形劇団ピコロ座も、前述の二つの事業の推進役として活動している。劇団創立が昭和30年だ

から、ずいぶん長い活動歴となってきた。子どもの文化を手作りで創りあげてきたものである。この間、子どもたちは常に創作活動の源であったと思う。子どもに学び、子どもと共に育ってきたと思う。

目を転じて、四国の仲間達の活動をみてみると、

(1)7月末の徳島国際人形劇フェスティバル。第4回ともなり、3市1町での公演となつて海外の4劇団と地元劇団の競演。

(2)9月中旬の香川県大内町、第6回レクと人形劇カーニバル。全国からプロやアマ18劇団が来町し、大内町主催として全地域で上演。

(3)11月中旬、愛媛人形劇フェスティバルを今年西条で実施。

四国四県が実施日時をずらして、それぞれ地域の特性を生かして交流を深めながら発展してきている。町起しであり、郷土伝承芸能の再現復活でありと、様々の形態で、人形劇を通じての文化創造の運動である。

全国的にみると、最も古くて長い歴史を持つのは、日本で初めてフェスを始めた北海道である。31回を数えている。全国各県各地にこの種フェスが実施され、花盛りである。

この中で特筆すべきは、第11回を迎えている飯田人形カーニバルである。長野県飯田市、そこは日本のへ

タクラマカン砂漠をゆく

中 そして砂漠へ

岩松弘記

3月12日、午前6時起床。朝食は、もしかすると再び口にするのができないかもしれない母の手料理を心おきなく食べ、普段はあまりのまな日本茶をのむ。やはり緊張しているのであらうか。

父は、私が出発するというのに、どこかそこらにいくかのように、しごく平然と「体に気をつけて行ってこい。」と一言だけ言いタクシーに乗り込む私を見送りもしなかった。父の行動に自分がそれだけ信頼されているのだろうか、とふと思いがながら、三原駅まで見送りに来てくれた母と比べてみた。やはり母は、私が中国に行くことが少し心配そうであった。私は、あえて母に心配をかけるまいようにと、新幹線のホームまで行くという母を制して、一人で駅の改札口に入る。ザックが肩にがっちり食いと食い込み、手に持ったサブザックとともにこれからの辛い旅を暗示するかのようであった。

22日、8時半ホテルを出る。前日から少し風が吹いているが、これは北方でカラブラン(砂嵐)が起きているためらしい。12時20分昼食。マントウ(中国風のパン。小麦粉をこねて蒸すだけのもの。饅頭と書く)とハム、ザーサイがメニュー。風が吹くので砂が飛び散り、砂と一緒にマントウを口の中に放り込む。午後3時40分、各小隊毎にラクダを10〜12頭ずつ連れて進む。私の小隊も、それにならって進んでいたが、すぐ後についていた山田さんのルオ号(ルオとは中国語で駱駝の意)が私の桂号に突っ込んできた。桂号と前の三木君のイングラムとを結んでいた紐がはずれ、桂号が私を乗せたまま暴走し始める。これがあのゆっくりと進む駱駝かと思われるような走り方で突っ走る。後ろについてきていた山田さんは、ルオ号から転げ落ちてくる。私は手綱を必死に引きながら「トウ トウ」と呼ぶ。しばらく暴走して桂号はやっと止まった。周りをみると全小隊がそんな風になってあちこちで駱駝が暴走している。結局この騒動が落ち着いたのは午後4時半。二頭の駱駝が逃げ、落駝した人は多勢いたが、幸い怪我人もなく、すぐに出発。午後5時40分、党河水庫到着。砂漠に出て極度の乾燥のためノドが痛くなったので

午後0時33分新横浜駅着。タクシ

1でサテライトホテルヨコハマへ。1時10分、結団式。すぐに隊装備品の各人へ割り振りが始まる。2時30分、ホテルから横浜港へ移動。4時通関、出国手続きが始まる。5時鑑真号に乗船。午後6時、蛍の光とともに船が岸壁をゆっくりゆっくりと離れ始めた。私はポケットの中から5円玉を探し出し、それを陸に向かつて投げた。日本に御縁がありますように、再び帰って来れますようにと願いをかけて。

船がタグボートに引かれて徐々にスピードを上げつつ東京湾に向かい出ていく。長い岸壁を友人達が手を振りながら大声で元氣で行って来いと叫びながら走って船を追い掛ける。岸壁の端までくるといつまでもいつまでも手を振っている。すでに陽は東の空に沈み、イルミネーションで浮かぶそのシルエットに私

薬を飲んで寝る。まさに波瀾に満ちた第一日であった。明日からは本格的な砂漠の生活が始まる。24日、先夜は10℃まで下がった。あまりの温度の低さのために全員のどを痛める。隊装備のどめを舐めて痛みをとる。今日もラクダの調子が悪く、少ししか進めなかった。午後2時15分、テントを立て始める。テントで寝るのは今日が初めてだが第五、六小隊で一つのテントは少し小さいようだ。小さいとはいっても5m×8mもある中国陸軍用のテントで保温率はよい。6時夕食、非常にゼイタクな中身。もう少し極限の様な生活をすると思っていたので拍子抜けしてしまう。

日本を離れる時の印象が強すぎたのか、乗船してからの3日間はあまり刺激がなく、朝食を食べ、トランプをし、昼食を食べ、みんなと談笑し、夕食を食べてお風呂に入って寝る、という生活を繰り返した。

3月15日、午前6時50分起床。船外の景色がすごいというのですぐに見に行く。すごい！上海の町が乳白色の霧に包まれてキンポ港から上海の町のあたりがボーと浮き上がっている。太陽はすでに昇りいくらか経っているであろう。しかし、濃霧のため、夜明け前のような薄暗さだ。8時30分下船。再び中国大陸の土を踏む。これでもう引き返すことはできない。決意を新たにす。

入関、入国の手続きの後、市内見学で豫園、魯迅公園へ。昼食を友好賓館でとり、その後再び市内観光。夕食は、上海工業展覽会場での歓迎会。我々の受入母体である北京国際広電播台(北京国際放送)や上海市の市長以下官僚と中国政府からやって来た吏僚の姿も見えた。16日は、市内観光の後、上海駅へ。11時35分列車に乗り込む。元日午後7時14分酒泉着。ここでバイク隊のみんなと別れる。7時50分、万里の長城の東の果て、嘉峪関着。19日午前1時01分柳園着。ここで全員下車。バスで一路敦煌へ。午前4時30分敦煌着。

25日は一日休息日。昨日から降り出した雪が15cm以上も積もる。雪が降っただけでも驚いたのに、積もったのでなお、びっくり。昨夜の気温は125℃以下になった様。はつきりしない表現だが、125℃以下になるような温度計はだれも持って来ていなかったからしようがない。あまりの気温の変化のために、体調を崩し朝から下痢。明日の出発までには、元に戻さなくてはならない。そのために早く寝るつもりが、近くにカザフ族のパオがあるというので、そこまで訪ねていくことにする。パオとは、カザフ族の人達の住居のことで、入ってみるとこれがまた意外に温かい。私達が来たというこ



タクラマカン砂漠をゆくわがラクダ隊

20日、装備不足分等の買い付け。21日、朝、駱駝の試乗に映画「敦煌」のロケ地へ。各小隊ごとに駱駝と駱駝使いの所に行く。駱駝は、各人が乗る駱駝を駱駝使いが決める。私達の駱駝使いは「老魯」と呼ばれる人で、気さくで陽気な人だ。私が乗る駱駝は小隊内で一番大きい駱駝だった。その人が乗る駱駝はこの旅が終わるまで同じということで、名前をつけてやる。私の愛駝は桂号と命名。鞍まで約2mもある。大きな桂号は、みかけとは裏腹に、非常におとなしい駱駝であった。ロケ地の周りを約4kmほど歩いて、その日の試乗は終わる。翌日の出発に備えそれ以降は自由時間となる。私は休養を十分にとった。

その日はあまり遅くならない中に帰った。翌26日、朝食後すぐに出発。カザフ族の人達が見送りに来てくれた。午後3時、テントを立てる。一日からの雪で、地面がドロドロで非常に立てにくい。午後4時、昨日、カザフ族の人達から買った羊を殺し、バーベキューパーティー。殺す時、哀しい気もしないではなかったが、食べなくてはならないのでしようがない。肉は非常においしく、食べ物は大切にしなればと改めて思う。3月27日、6時起床。今日は駱駝の調子も良く、30kmも進む。今日の道はずっと上りで、まるでその道自体が天に向かっていくかの様で、左側にあるキレン山脈も雪化粧してとても美しかった。午後3時頃いきなり、あられが降ってくる。1kmもある氷の塊が無数に落ちて来た。やはり、砂漠の気象は判らない。午後9時日没。雪化粧したキレン山脈が真っ赤に燃えていた。しばらくの間、煙草の煙りをくゆるに任せてボーッと山脈を見ていた。

今日、わが第六小隊の隊長であった徳田氏がやめたので、代わりに私が隊長になった。全小隊の中で一番年の若い19歳である。明日からはまた、新たな気持ちでの旅が続く。(高知大学人文学部2年生) ※タクラマカンとは、ウイグル語で「はいると出られない」の意。



カザフ族の家族と筆者



食用に羊をさばく

とで、男の人達が歓迎の歌を歌ってくれた。タンブラーという馬頭琴に似た楽器を弾くのであるが、これが2弦しかないのに、実に多彩な音が出る。感激のあまり、つたないウイグル語で一緒に歌い、

風のいのち

大町 倫

「風の季節」という映画がありました。どこまでも続くドイツの田園風景の中に、そよりと立つ風のような青年と、暖かい日差しのような奥さん、全編にモーツアルトのピアノコンチェルトが流れ、風がたまなく吹いていました。心に残る風景です。

誰もいない部屋に、ふわりとカーテンだけがゆれているアンドリュー・ワイエスの絵があります。誰もいないはずなのに、その部屋に確かにいのちが在るのです。風のいのちなのでしょいか。

「客人は野田の稲穂をまろび来し風あまたある間におはしませ」私の好きな晶子の歌です。風にそよぐ木や草が好きです。鏡川辺の大楠の根元に立って、梢を渡る風を見ていると、心がどこまでも自由でやさしくなっていくような気がします。

園庭を一人の保父さんが走って行きます。彼のまわりに風の渦がうまれ、子ども達は巻き込まれるように、歓声をあげながら、後について走ります。

胸がキューンとなるような光景でした。先生のつくる風のマントに子ども達が包まれているようでした。私達が踊ると風が動くということも教えてくれたのは、盲目の子ども

達でした。その子達は、私達の動きを頬や体に当たる風の動きで感じるのだそうです。三十年余り踊ってきた、その動きが風をつくると思ってもよみませんでした。これを知らされた事は大きな喜びです。

いのちの量とは、自分のまわりの空気を、どれだけ動かして死ねるかということなのかも知れません。一杯に動いて、気持ちのいい風を、まわりに送り続けたいものです。

私は風のように踊りたいと思って来ました。「体の動きで空間に詩を描きたい。」と思って、ダンスを創って来ました。作品「天を織る」は、そう念じる心の表れでした。昨年の作品「花明りの道」は、風に舞う散華の中を、あたたかく歩む喜びでありました。ダンスは、ダイナミックなイメージであり、その動きは風となり熱となって、人々の心に届くものであると信じています。

どんな作品に向かう時でも、ある時ふっと心に宿り、魂をゆさぶるような「ひと流れの動き」に出会うことから始めなければなりません。モチーフとかフレーズとか呼ばれるこの「ひと流れの動き」に出会えるかどうか、創作のいのちです。その動きを繰り返す度に魂が高揚するよ

力の思想に随順した姿だったのである。

大日本帝国憲法第一条は「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と、天皇主権を宣言し、第二条は、その「天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ」と定め、しかも天皇を現人神(あ

るが、事実は室戸岬ごしに東京の天皇に向かっているのだ。

一九六六年九月、このことをラジオ放送に乗せたところ、かつて龍馬銅像建設運動の先頭に立った青年のひとり、大野武夫さんが九月一八日『高知新聞』の読者の広場に「坂本

生き続ける自由民権 ③

片岡健吉銅像

外崎光広



健吉の旧像が東に向いていたのに、新像がクルリと回って西に向いたのは、我が国の歴史の百八十度の転換を象徴している。

かつての高知城址には四体の銅像があった。藤並神社境内にはよろいかぶとで武装し、槍を抱えた馬上姿の藩祖山内一豊・二の丸には徳川將軍に「大政奉還」を建言したこと

有名な、東帯姿の十五代藩主山内容堂・城への登り口には洋服姿の伯爵板垣退助、それと片岡であり、いずれも東面していた。

これは無意味に東に向いていたのではなく、はるか東京に住む天皇にむいていたのであり、当時の政治権

らひとがみ、この世に人の姿となって現れた神)だとされた時代のことだから、宮城のある東京に背を向けることは許されなかったのである。

龍馬はかく答える」を寄稿(『無門塾 大野武夫集』収録)した。

龍馬に語らせたこの一文は、除幕式に作成者の「本山白雲さんが読んだ報告書のように、『銅像の東面せるは、はるかに九重の宮けつ(宮城)に対して勤皇の至誠をあらわし、南

しこまれ、動きこむうちに胸の内が熱くなるような、そんな「ひと流れのうごき」は、天からひらりと舞い降りて来るような気がします。自分を自然体にして、無心にダンスに向かっている時のみ、天から風が運んで来てくれるのです。天から吹く風を信じて、これからも体いっぱい

◆好評発売中◆

画帳の歲月

筒井 広道 著

A5変型・二五六頁
定価 二、〇〇〇円

高知画壇の第一線で活躍してきた重鎮の美と画業についての珠玉のエッセイ。美術学校入学から高知大の教授時代、渡欧の体験等、多年にわたる業績を振り返る。また、初期から関わってきた県展の知られざる内情やヨーロッパで見た名画を中心に語られる肩のこらない絵画論など、絵画への興味を湧かせる美術エッセイ集。挿画として十六点をカラーで掲載。

太平洋を望めるは志海にありと豪語せし先生の雄図を表現するものなり」ということになっていて、僕は東向いて、南向いているというややこしいポーズだ」と。

一九四五年に、それまで一五年間続けた侵略戦争に敗れたため、大日本帝国憲法が廃棄され、天皇主権は消滅した。代わって「主権が国民に存することを宣言」した日本国憲法が成立した。

この歴史の転換によって、はじめて片岡健吉が東に背を向け、西に向かつて立つことができたのである。片岡の銅像をめぐってもうひとつの興味深い歴史的象徴がある。それは山内の家臣だった片岡と板垣の銅像が、ふたりの藩主のそれをさしおいて再建されていることである。封建制をうち破き、近代民主主義日本の建設をめざした自由民権を象徴する二人が、封建制の象徴に優先したこの象徴は、厳然と流れ続けている歴史法則の顕現である。

(松山大学教授)

荷馬車

坂本正夫

土佐へ馬車が入ったのは明治三年（二八七〇）のことで、知藩事山内豊範が手に入れたのが最初だが一般化しなかった。ついで明治二〇年には高知・伊野間に初めて乗合馬車が開通し、その後道路網が延びるにつれて乗合馬車区間が延びていった。荷車も急速に普及したが、初めは二輪の手引車や馬に引かれる荷車で、後者は手木を持つ者と馬を引く者の二人がかりであった。馬が引く四輪荷車は野村茂久馬（一八六九―一九六〇）が明治三十七年に神戸から移入したのが最初だといわれているが、これは一人で扱うことができ、積載量も多かったので評判が良く、大正中期までには県下の村々へ普及した。この四輪荷車は初めは鉄輪であったが、やがて空気入りのゴム輪に変わり、昭和二〇年代（一九四五―一九五五）まで小運送手段として利用されていた。

ところで荷車、荷馬車が通るようになった時期は、地形や道路の条件によって地域的な差があった。たとえば須崎から梶原へ通ずる津野山線が開通したのは明治三四年であったが、これによって物資が荷馬車で運ばれるようになり、荷馬車引きという新しい職業が山の村にも現れ高賃取りとして人気があった。時代は少し下がるが大正十一年（一九

二二）の東津野村戸数割資力調査表によると、一日収入は大工二円、左官三円、鍛冶二円五十銭、荷馬車引き四円というような状態であった。こうして製紙原料の三椏、楮、木炭、木材などを積んだ荷馬車が毎日ぞろぞろと須崎の町へ向けて通るようになった。

県道窪川―宇和島線が大正町野野まで開通したのは大正三年であった。このころ手引の車力や馬引きの荷車が入って来て、今まで佐賀港へ山越しで出していた木材が中土佐町の久礼港へ運ばれるようになった。間もなく大正五―六年には四輪の荷車が入って来た。

この頃から営林署の材木を積んだ荷馬車が、毎日長い列を作って久礼の貯木場まで通る風景が見られるようになった。荷馬車引きたちは自分たちの地区ごとに仁井田組、窪川組、大正組などという組を作って集団で行動し、寄り合い（馬車組合）があつて運賃の協定などをして結束していた。

ところで大正末期になると、この地方へもトラックが現れるようになった。荷馬車引きたちはこれに反対



大正末期の荷馬車 ―中土佐町久礼―

して、トラックが後方から追い越そうとしても絶対に道をあけないことを決めて対抗した。一番長く引つ張ったのは窪川町川口―大井野間（約四km）で、トラックの前方をたくさんの荷馬車がのろりと行列を作っていたという。

若いころトラック運転手だったという須崎市のお年寄りからは、葉山村姫野々から須崎市上分まで約五km引つ張られたことがある、という話も聞いている。

（高知県立小津高校教諭）

室戸のシットロト踊り 古風な被り笠

高木啓夫



夏の夜の、星空のきらめきがまだほのかにみえる。夜明けの薄闇のなかから鉦と太鼓の音が響く。

へまず、宵に殿御
待つ星、待ちいでて、夜中にいでる星
待ちいでて
夜中にいでる星

優雅な、ゆったりとして歌の調べがよどみ出る。それは静かに打ち寄せる潮騒と戯れながら、ゆかしく流

れゆく。夜明けがほの白くあけゆくと、浴衣姿に編笠を被った踊り子たちの姿がみえてくる。その数、二十人あまり。ゆっくりと巡りゆくかと思えば、後へと踏みもどる。もどっては巡りゆき、打ち振る扇が花を咲いて散りゆく。

旧暦六月十日、室戸市元の恵比寿神社から踊り始めた「シットロト踊り」は、崎山の西寺、奈良師の地藏堂、津寺近くの一本神社など二十数カ所の神社を巡り踊る。踊り終わるころには、夏の太陽は西に傾き、限りない水平線に映える。

土佐に数ある民俗芸能は、祭りの日に、社寺の庭や旅所で奉納されることを常とするがこのシットロト踊りだけは、このように一日中複数の社寺を巡って踊るのである。ひと昔重病人があると、その集落の者たちが群れをなして七カ所の社寺を拜ん

で回る「七カ所参り」という祈願が行われていたが、このシットロト踊りが、なぜこうした巡礼形式を行うようになったかは明らかでない。

シットロト踊りの被り笠もまた県下唯一のものである。この踊りは室戸漁業協同組合を中心とする漁民たちによって踊られているが、それを象徴するかにようにマスト状の飾りつけをして、赤い猿の縫いぐるみを必ず飾っている。猿は災厄を去るに通じるからだといひ、氏子たちはこの笠をただだかせてもらって縁起をかつぐ。ただだかせてもらうとは被らせてもらうことである。一見異様ともみえるこの笠飾りは、徳島県祖谷の「神代踊り」にも、徳島県新宮町の「鐘踊り」にもみられるものであるが、こうした笠飾りが、なぜ県下でシットロト踊りだけに伝えられたのであろうか。

シットロト踊りは、県下各地の秋祭りに奉納される「こおどり」の系譜である。民俗芸能は必ず伝播性を伴う。「こおどり」は京の都から伝えられたともいふ。伝播はまた必ず変容を伴う。伝えられているうちにその姿を変えてゆくのである。シットロト踊りの被り笠は、その伝播と変容に耐え抜いた古風な被り笠であるかも知れない。

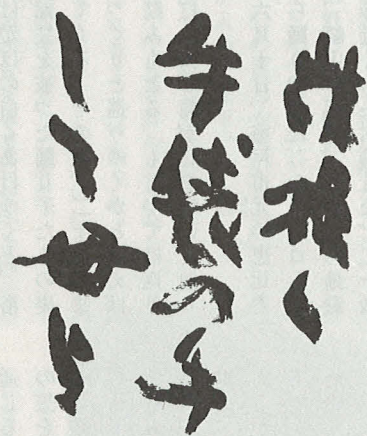
（高知県立高知工業高等学校教諭）

白く黒くの 小宇宙

関田菊子

第五回展の取材に来た若いアナウンサー嬢に、
「あなたにとつて書とは？」
と聞かれて困ってしまった。小さい
中学校に転動して間もなく「書写」
の授業を持つように言われ、当時鹿
児に住んでいた、故高松慕真先生の
門を叩いたという、至極現実的必要
から、この道に入った私である。
爾来四十年近くの書生活であるが
「なぜ書くのか？」と改めて聞かれ
ると迷ってしまう。強いていえば、
「私が生きていて、たまたまそこに
書があった（縁があった）から」と
いうことだろうか？
生来泥くさくて不器用な私は、華
麗でハイカラな書など出来るわけも
なく、主として、自然とそこに生き
る人たちを素材とした。今回展のあ
と、嶺北に住んでいる昔の父兄から
「先生は、僕たち金釘流の字とめつ
そうかわらんばあ下手で、ひやく
しよう」とは別の世界に住んじゅう
と思ひよつたけど、僕らの身近の
ことを書きちよりますねえ。」
と言われて、胸があつくなくなった。自
然の大きなふところに抱かれて、素
朴で、仔牛にソータを着せるやさし
さを持った人たち。峠をこえた時、
目の前に広がった一面の三極の花。
それら風物への思いが、私の素材え
らびとなっているからである。

今回展を機に、はじめて作った作
品集に、私は旧作廿点を含めること
にした。
書に明け暮れた九年間の嶺北の生
活。凍てつく冬の早朝、体育館に紙
を広げた山峡の学校。その大作には、



凍った墨の魂が、そのままついて、
しかしそれも偶然の効果となってい
た。
「権兵衛どんが死に田吾作が死に
誘蛾灯」は高名な作曲家松村禎三氏
の若い頃の俳句であるが、その夫人

とは、学生時代の友人であるという
縁があった。一九八〇年、これを書
いた時には、もうすでにそのほの青
い光を知る人は少なくなっていた。
N 学園で出会った障害を持つ子ど
もたちとの生活の思い出は、「でで
むしうまれてる」
（裸木）や「うごいて
みの虫だったよ」（山
頭火）の作品となった。
これらの作品は、ま
るでタイムトンネルを
くぐって、私の四十年
近い生活を甦らせ、さ
ながら自分史を綴るの
感があった。
かつて私は写真や絵
画を羨ましく思ったこ
とがあった。しかし、
白と黒。その単純で強
烈な世界。白と黒の微
妙で神秘的な響き合い。
この東洋的で精神性の
高い「書」に魅せられ
ている今日この頃であ
る。輝く空間を願って、

これからも私の「いのち」を紙面に
刻んでいきたい。それは土と光にみ
ちた、「関田菊子」という人間の「存
在感」のある作品でありたいものだ
と、切に願っている。
（書家）

—第2回高知の映像コンテスト入選作品—



高知を撮る 秋日和 浜口俊一

ワープロがごく普通になってきた。
職場はもちろんのこと、同窓会の案内
や町内会のお知らせなど、ワープロで
ない文書がむしろ珍しくなってきた。
我が国に、初めてワープロが登場し
たのは昭和五十三年。東芝「JW-10」
という国産第一号機で一台六三〇万円
もしたという。それが今では、安いも
のでは二〜三万円。
次々と新製品ラッシ
ユで、業務用の高級
機種でも一〜二世代
旧タイプのもでは
定価の五〜六割引き
で入手できるという
変わりようだ。
ワープロとは、正
確には「ワードプロ
セッサ」（単語処理
器）のことで、「コン
ピューターを応用し
た「文書作成器」の
一種である。
「文書作成器」といっても、ただ単に
文書を作成するだけでなく、最近では
「表計算やグラフ作成機能」「住所録
や顧客管理等のデータベース機能」
「通信機能」や「高度の編集機能」、
さらにはプリントゴッコ等と運動して
「カラーの年賀状制作機能」を備えた
ものなどが、人気商品として市場を賑

現代風俗を考える〈10〉



ワープロ

わしている。
さて、一昔前の昭和三十年代。学校
や官庁ではまだ「ガリ版」が全盛時代
であった。ヤスリに鉄筆でガリガリと
筆耕し、一字間違える度に鉄筆の上下
を持ち替え、元でこすり、煙草の火を
近づけて蠟を溶かし、丁寧に書き直す
といった光景があちこちで見られた。
一字でもそつだから、
五〜六字、まして数行
にわたる修正となると
実際大変なものであ
った。当然書くことには
慎重、真剣にならざる
を得なかった。印刷に
しても、ローラーのイ
ンクの付き具合を確か
め、心をこめて丁寧に
刷りあげたものだ。
ところが今、ワー
プロと「ワープロ」機の普及で
状況は一変。文書の削
除・挿入は自由自在。
セットさえしておけば他の仕事をして
いる間に必要枚数ができてしまつとい
う利便さ。にもかかわらず更に便利な
機能へと欲求はエスカレートし、新商
品の登場はまさに生鮮食料品並みだ。
もつと年賀状を書く季節。いくら便
利だからといって、宛名までもワー
プロでということだけはしたくない。

総合文芸誌「太平洋文学」

二十二年の歴史
北 あきら

太平洋文学会は、追手門の近くの堀を渡った所にあった高知市立中央公民館の二階で、二十二年前に誕生しました。最初の五年間「太平洋文学」は年四回刊でしたが、オイルショックで紙代等が値上がりし、以来年二回を余儀無くされています。その間、春秋確実に発行し、現在五十五号の編集途中。会員は二十名。総合文芸誌でこれだけの長命は少なく、県内よりも全国的に名前が知られています。



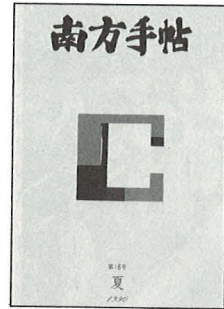
治安維持法下の埋もれてきた人々の活動を掘り起こし、全国的に知られた植村浩、県内の傍間によって殺された人々などを明らかにしたのは本会です。現在も、東京在住シナリオライター片岡薫氏の「高知のロマンチスト銘々伝」を連載中です。また、北あきらをはじめ、創作、詩等で県外でも高く評価されている会員、単行本を刊行している会員、さらにはまた、

詩誌「南方手帖」

同人と読者の力に支えられて
坂本 稔

昭和三十九年の秋（東京オリンピックの年）に創刊。最初は坂本稔季刊個人誌として出発しましたが、第15号より同人誌に切り替え、県下在住の詩人の作品を中心に続刊。

昭和五十六年三月、第27集「松本慎一追悼号」を出して休刊。後、S社N氏の支援を受けて復刊。昭和五十七年六月復刊第1号を刊行。第10号まで毎号、『土佐抒情詩選』『児童詩特集』『四国の詩人』などの特集を組み、第11号より全国的に同人を募り、少数ながら読者組織も確立、更に詩のみにこだわらず、短歌、随筆等の作品も掲載するようになりました。今年の夏、第18号（通巻45号）を発行したばかりです。振り返りますと、はや四半世紀の歳月が流れています。氣息えんえんとよまあ今日まで続いてきたものだといふが事ながら呆れております。勿論、私一人の力では到底今日まで持



作品は書かないが、この文学活動を支える広める意義を認めて参加している会員もいます。会員、賛助会員の制度もあり、会費も少額で、県内の文芸愛好家などなだでも参加できますので、多くの方の入会を希望しています。ちなみに、五十四号は、原稿用紙四百枚分も入った大冊です。

連絡先 南国市久礼田九二九
太平洋文学会
電話 〇八八八―六一二九二五



「山田橋」。高知市内に現存する一番古い永久橋で、大正8年の架橋。車の通行量が多く、隣に歩道橋が新設されている。南岸の袂にある桐樹の木が、わずかに昔の風情をとどめている。

ムービークラッシュ

自主映画にかける
藤田 直義

一回の上映会で何万円、時には十何万円の出費を強いられることがある。10年前に自主上映を始めた頃には、赤字を出してまで映画上映するとは何てバカな、という空気が強かった。しかし、最近はいく空気も強くなった。しかし、最近はいく空気も強くなった。しかし、最近はいく空気も強くなった。しかし、最近はいく空気も強くなった。



自主上映にあつては上映ラインナップが一種の表現であり作品なのである。この10月27・28日、他の自主上映団体と合同で「高知自主上映フェスティバル」を開催したが、11月17日には、「山形国際ドキュメンタリー映画祭89」を開催する。映画産業の現在が、映画を見ることの現在と関わりを持ってない今、自主上映は自ら人々の出会いを演出し、新しい映画の誕生を準備するのである。

ちこたえることはできなかったことは確かです。これからも同人と読者の力に支えられて、行けるところまで歩み続けるつもりです。『詩』や『同人誌』の冬の時代に、あえてこの道を行くこととするのもいごっそうのなせるわざでありましょうか。マンガの雑誌が何百万も売れるのに、たった三百円の文芸詩雑誌がほとんど売れないという現実を見つめながら――。

連絡先 吾川郡伊野町波川一六二二
南方手帖社（坂本）
電話 〇八八八―九二一―一七七

連絡先 カフェレストはと時計
（南 明男）
電話 〇八八八―三二一―一五一

「高知医科大学管弦楽団」

常任指揮者を迎えて
東山 佳澄

高知医科大学管弦楽団は、在校生を中心にOBなども含めた四十五名からなる楽団です。大学に入学してから楽器を始めた者も多く、まだまだ決して上手とは言えませんが、「音楽に対する情熱では誰にも負けない」と自負している仲間たちの集まりです。演奏会があると聞けば、例え高松であろうと愛媛であろうと、団員揃って聴きに出掛けることなどは、日常茶飯事です。

そんな我が楽団が、この度、プロの指揮者の先生を常任指揮者に迎えることになりました。これを機に、さらに完成度の高い演奏をお聴かせできるように、団員一同練習を重ね、邁進していくつもりです。

我が楽団も近年規模が増し、今年までは県民文化ホールでの定期演奏会を、来年はオレンジホールで行う定期演奏会を皮切りに、大学祭でのコンサート、大豊町でのミニコンサート等があり、今年には特に附属病院の入院患者さんを対象としたコンサートも予定しています。



ことになりました。曲目の面でも、今年はブラームスの二番という大曲をなんとかこなすことができ、来年はこの曲に負けず劣らぬ大曲を演奏するつもりです。又、大学祭では、クラシックだけでなく映画音楽などを取り入れ、幅広い演奏を行っています。常に皆様に楽しんでいただけるようにと心掛けていますので、コンサートの折にはぜひとも足をお運びください。

連絡先 高知市一宮一六七七のー
イズミハイツ三〇三号
電話 〇八八八―四五―〇四二三

風伯

文化施設

高知県ではこのところ、文化施設の充実を目をみはるものがある。例を上げれば、美術館・歴史館・自由民権記念館・龍馬記念館、あと第2文化ホール等々、一挙にやっつけてしまおうとする意欲が強く感じられる。しかしながら、おや!と思うことがある。それはすべての施設をバラバラに散らしたことにある。これを全部回るとなると、交通費だけでもばかにならない。これは正反対に、お隣の徳島県で、今年11月3日にオープンする「文化の森」。美術館・図書館・文書館・歴史館・情報センター

等々、5つの施設を物の見事に1カ所にまとめた。高知県と徳島県、どちらがいいのか、賛否両論はあるが、少し考察を深めてみたい。高知県は全国でも有数の老人県。この人達の余暇を過ごす文化施設。今後ますます多くなるこれらの人々が回るのは、バラバラでは文化に接するまでに疲れてしまう。また関連したことを調べるにもどうも具合が悪い。こういうことから考えると、高知県の場合には思いつきで建てていてはいいかとも思いたくなる。つまり、利用する人達の立場に立っていないのではないか、交通の便、市街地の過疎化、いろんな意味から考えさせられる。文化というのは、肩のこらないものでなくてはならないはず。せめて、これらを回る無料バスでも走らせたら、少しは罪滅ぼしになるのかも。(遊)

文化高知の定期継続読者

賛助会員募集中!!

会費 年2,000円(前納)

- 特典**
- ① 機関紙「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
 - ② 事業団発行の出版物の10%割引(一部例外あり)
 - ③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)
- [※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効]

申し込み ①郵便振替 ②現金書留 ③直接事業団へ… のいずれの方法でもけっこうです。

声優 巖 金四郎氏を迎えて

朗読を楽しむ

朗読公開講座

- ◇日時 11月18日(日) 13:00~16:30
- ◇場所 高知市立自由民権記念館「民権ホール」
- ◇参加費 1,000円(テキスト代を含む。当日、会場で)
- ◇定員 先着100名(実技指導希望者は先着10名)
- ◇申し込み 電話又はハガキで文化振興事業団へ
11月9日(金)までに

— 内 容 —

- 公開実技指導(10名)
- テキスト・椋 鳩十「大造じいさんとがん」
• 太宰 治「走れメロス」
- 巖氏を囲んで「朗読」をテーマに話し合い
- 模範朗読「ごんぎつね」

高知を撮る

〈受付〉1月10日(木)~1月31日(木)

作品募集

第7回高知の映像コンテスト

- 〈テーマ〉「高知」— 記録性を持った古い写真から現代のものまで可。
- 〈応募要領〉
- 応募資格は、撮影者または著作権保持者に限る。
 - 作品は四ツ切以上、発泡スチロールパネル貼りとする。
 - 組写真は、3枚組みまでとする。
(ただし、古い写真はこの限りにあらず)
 - 作品1枚ごとに、裏面に応募票を貼りつけること。
- 〈賞〉 特選2点・準特選15点・入選100点
(特選・準特選の原版・著作権は主催者に属するものとする。)
- 〈入賞作品展〉「とでん西武」で開催予定(くわしくは文化振興事業団までお問い合わせください。)

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL(〇八八八) 73四三六五
郵便振替 徳島8-14869